

研究室紹介 (文系)

飛翔の定番記事となった研究室紹介ですが、今回は学生にアンケート調査を行って各コースから一人、取材先を選んでもらいました (今後も随時、リクエストを受け付けます)。精鋭ぞろいの八人の教官陣。それぞれの研究室に取材に行ってきました。

村田晃嗣研究室

A626 (地域文化コース)



見よ！この膨大な蔵書数を！

【研究内容】

- ◆アメリカの対外政策決定過程
(外交政策が決まってゆくプロセス、つまり大統領や議会、官僚機構や軍部の間のかけひき)
- ◆アメリカの東アジア政策
(とくにベトナム戦争が激化し、米中接近、米ソ・デタントが進む1970年代以降)

【研究室の雰囲気】

- ◆物理的には“messy” (散らかっている) の一語。
- ◆いつでも遊びに来て下さい。

【学生に一言】

- ◆遊ぶのはいいが、勉強しないことを自慢するのはやめましょう。
- ◆大学は「すぐに役に立たないことを学べるところ」です。精神的ぜいたくを楽しみましょう。
- ◆どうしてみんな茶髪なの？

石倉康次研究室

A710 (社会科学コース)



正面左側が石倉先生

【研究内容】

- ◆ゼミ生は、児童養護問題や高齢者・障害者問題、非行問題、青年問題をテーマとしてきています。留学生は日韓の福祉制度の比較研究をし、院生は介護・看護の専門職制度の研究を行っています。私は、目下、痴呆性老人のかかえるハンディキャップを社会学の視点から研究しています。

【研究室の雰囲気】

- 多人数のわりに穏やかで、報告はたんたん進む。お茶やお菓子を食べながらの団らんタイムも多いと思う。
- 授業以外の活動 (ボランティアやゼミコン) が豊富なので、ゼミ生とおしのつながりは特に強いと思う。
- とても和やかで、ストープのようにあったかい雰囲気です。まるで家族のように“石倉パパ”を中心に仲良くまとまっています。ゼミ以外の時間にもみんなで一緒に活動できる機会が多いこと、メンバーがバラエティーに富んでいること、ゼミ終了後においしいコーヒーとお菓子でおしゃべりできることなどが特徴で、とにかく居心地がいいのです。研究室の椅子が足りないのと、朝1コマからゼミが始まることを除いては、もう言うことなしです。

【学生に一言】

- ◆自分のやりたい専門をみつけ、自分なりのアイデンティティーをもてる職業分野を選択することが大学4年間の獲得目標のひとつだと思います。しかし、これは思うほど簡単なことではありません。チャレンジ精神と知的好奇心が不可欠です。

【先生はこんな人です (研究室の学生より)】

- 温厚。まだ先生のおこったところを見た人に会ったことはありません。4年に一度ぐらい大爆発するのもかもしれない…。自分がそのくじをひかないようにしたい。
- いつもほほえみを絶やさない、七福神を足して7で割ったような先生。見かけも中身もお若くて、いつも元気に7階から階段をかけおりていかれます。学生の中にまじっていても全く違和感なく同化してしまう先生の笑顔はまるで少年のようですが、ゼミの時間にはしっかりと私達をひっぱって下さいます。

古東哲明研究室

A717 (人間文化コース)



前列中央が古東先生

【研究内容】

- ◆現代の思想
- ◆西洋と東洋の霊性 (Spirituality) の研究
- ◆現象学

【研究室の雰囲気】

- ◆乱雑な世界です
- 喫煙者に優しい・肺に厳しい
- いろいろな意味で刺激のある研究室
- 通常の空間とは違った独特の場所・異空間
- 講義では質問にくいけどゼミは院生の方とも何でも言えて楽しい勉強になる
- 「ピタゴラス派の使徒かまるで何かの新興宗教のセクトのようだ」という噂をよく聞きますが、そのような感じは全く(?)ありません。同類は同類を呼ぶといいますが、まさにその通りの楽しさ(???)があります。

【学生に一言】

- ◆30年周期のステューデント・パワーに夢を託しています。

【先生はこんな人です (研究室の学生より)】

- すごい
- ある意味、化け物、ですかね。
- 書く文字がうつりやすい。なぜか?
- 時々、放蕩息子の父親のように感じる時がある。
- この人はすべてわかっているか、なにもわかってないかの、どっちかだ!
- なんとも形容しにくい人。愛弟子はキティちゃん。
- この先生も、まるで「教祖様のようだ」とウワサされていますが、本当か否かは御自分でおたしかめ下さい。個人的な意見ですと、先生は人間的な魅力とスケールの大きさをもたれたお人だと思います。



伊藤詔子研究室

A423 (外国語コース)



中央が伊藤先生

【研究内容】

- ◆アメリカ文学とアメリカ文化—今学期は特に American Nature Writing を研究しています。American Nature Writing というのは、1980年以降注目されてきた文学ジャンルで、ecocentricism (環境中心主義) に立つ自然と環境をテーマにする文学で、Rachel Carson や Alice Walker, John Muir 等を、様々な角度から読んでゆきます。この立場に立つ文学研究方法を ecocriticism (エコ文学批評) といい、方法論も従来の文学文化研究のみならず、文化人類学、フェミニズム批評、文化研究等様々なものを駆使します。

【研究室の雰囲気】

- ◆19世紀アメリカ文学を中心に、フェミニズム、ネイチャーライティング、文学批評と幅広く研究書や関係資料等が集めてあり、大学院生は自由に出入りし、活発な研究活動が展開しています。又研究会やアメリカ人学者を招いてのゼミナーも割合多く、目下は「エコフェミニズム研究会」を行っています。
- ◆部屋は雑然としていますが机の上がきれいに片づく時は仕事をしなくなる時だと思っています。

【学生に一言】

- ◆自分の研究対象の意味を当然視しないで、疑うところからはじめて欲しいと思います。
- ◆論文指導は、自分が学生だった頃と比べると数倍懇切ですが、学生は、特に院生は、研究者としての独立心を持ってほしいと思います。
- ◆学部生に一言——2年生のカリキュラムのたて方が、よい論文を書くことにつながると思うので、一つの道筋をたてて時間割を組んで欲しい。皆とってるからとか「楽勝」だからというのは困ります。

【先生はこんな人です (研究室の学生より)】

- 時折、ユーモアをまじえながら深く鋭い学識と個人的学問的エピソードの結びついた講義の名調子は、芸術の域まで達しています。
- 多忙の中、学生の論文指導はもちろんのこと、自主的にフェミニズムの研究会を開いたりして教育活動にも熱心な先生です。

「総合科学」の最先端

～総合科学研究プロジェクト～

今、総合科学部という船は暴風雨の中で翻弄され、その船の中で教官、事務官、学生という乗組員と乗客は限られた資材を使って果敢に修理し、船外に新たな船を造ろうとまでしているようだ。暴風雨とは大学の自主性を尊重した「大綱化」に伴うカリキュラム改革（専門教育と教養的教育）であり、大学院の重点化を考慮したその整備充実である。この内なる暴風雨のすさまじさの一端は、巻頭言と特集「カリキュラム」で窺えると思う。学外からのそれは、広島大学構内とその近くでの交通事故や刑事事件の発生である。東広島市という緑豊かな田園に突然出現した20歳前後の大集団とその引率者は、余りにも世間知らずであったようだ。これについては、「社会からの声」を見て置き、より良い方向に改善する努力を続けていく必要があるだろう。

さて、大学院の整備充実について、広島大学は基本方針を1992年12月1日に制定し、その中で「萌芽的研究を学問に育てるという大学における研究の使命を遂行するため、分化した諸学を統一する視野に立ち、学術の本質の解明を目指して総合的に教育研究を行うための研究科を設置する」ことが提案された。この方針を受けるかたちで、1993年12月に総合科学部のコース委員会将来構想小委員会は「総合科学研究センター（仮称）」の設立構想とそれが開設するプロジェクト研究の提案をおこなった。後者については、1996年2月22日に「広島大学総合科学部総合科学研究プロジェクト事業内規」として制定された。そこには、「総合科学部に所属する複数の教官の協力」のもと、「文系と理系にまたがる共同研究をはじめ、さまざまな形の総合的、学際的研究を育成、推進するための研究プロジェクト」の実施をうたっている。そして、1996年度にこの事業が実施にうつされた。

総合科学という確立した学問体系はまだ無いと思う。しかしながら、他所から総合科学部では総合科学をやっていないと言う批判が聞こえてくる。ならば、総合科学部はその名称にふさわしい研究成果を、総合的研究として、あるいはこれから学問として認められるかもしれない「胡散くさい」研究として他学部を示す必要があろう。こうして何人かの教官はこのプロジェクトに応募した。



1996年度は総合科学研究プロジェクトとして6件採択された。代表者名と研究テーマを記すと、岩田賢司教授の「世界平和システムの総合科学的研究」、上領達之教授の「生命活動を統御する新奇な空間伝達シグナル」、開発一郎助教授の「土壌-植物-大気連統系（SPAC）における自然樹木・土壌水分の測定とストレスに対する樹木の感受性の変動に関する研究」、日下部真一助教授の「社会貢献教育プログラムの構築」、筒井和義教授の「本能と学習・記憶の制御システムの多角的解析」、中根周歩教授の「環境へのヒューマン・インパクト総合評価手法の検討」である。今回は、非常に興味深い二つのテーマの代表者に研究の意図や成果を示してもらった。

（文責：富樫 一巳）

はたして植物は音楽を聴いているのか？

—生命活動を統御する新奇な空間伝達シグナル—

上 領 達 之（生体行動科学コース教授）

総合科学には魅力と胡散臭さが同居している。言葉の上では科学が総合性と相反するからだ。ニュートンは一度も科学者と呼ばれなかった、という言い方がある。彼の時代に科学者（サイエンティスト）という言葉がなかったというのがその理由である。その時代の知識人が理解しようとした自然の摂理の全体を、19世紀の人間が細切れにした。化学だ生物学だ諸々の科学に分け、そのうえに無機化学や有機化学という族学（こんな言葉はないが、霊長目ヒト科ホタル族と書けば「科」の意味ははっきりするだろう）さえ作った。その一つを選んで精を出すのがケミストやバイオリジストと称する科学者なのだ。ピアノを弾けないチェリストが、あれはピアニストのすることだ、と平気でいられる事情とよく似ている。¹⁾

だから総合科学と聞くと、ボーアの量子論が物理学と化学の間の壁（といっても正体は枯れ尾花なのだが）を取り払ったように、個別の科学という檻から自然の摂理を解き放つといった風な魅力を感じる。そしてまたこの時代にそんなこと、ほんまにできるんかいな、という胡散臭さも感じてしまうのだ。

*

草木に水をやる時、優しく話しかけてやらないと綺麗な花は咲かない、と思うのは信仰の問題であり、圃場に多数のスピーカーを設置して栽培中の作物にセレナーデか何かを聴かせてその収穫量を増やすサウンド農法は経済の問題である。その気になって本を読めば、進化論のダーウィンが真剣に音で植物を刺激しようとしていたこと、リタラック女史の研究で植物がロックではなくクラシックを流すスピーカーの方向へ屈曲して成長したこと、カボックに演歌を聞かせると葉の表面で激しい電位変化が誘発されること（櫛橋康博）など、いろいろと出てくる。

学部紹介の時、高校生から「植物が音楽を聴くかっていう研究、総合科学部ならできるんですか」と尋ねられた。痛みは感じたけれど、すぐ挑発に乗るわけにもいかない。そんな折りの日本分子生物学会の大会で、東海大学の松橋通生という先生が、細菌が音を出したり聞いたりしている、という主旨の発表をした。彼は1960年代前半を、分子生物学が勃興するアメリカで過ごした正統的かつ厳格な微生物生化学者で、チェロを弾く。

*

分子生物学とは生命情報の管理の仕組みを解明した科学である。その成功の秘訣は研究材料に微生物を使ったことにある。それ以前の、たとえばメンデルはエンドウマメを使った。彼が20世紀に甦っても、材料をマメに固執したならこの科学の発展に寄与はできなかったろう。植物も動物に劣らず複雑である。その情報管理メカニズムの複雑さは細菌のそれとは比較にならない。分



後列右から2番目が上領先生

子生物学の成功は、ものごとの本質を知りたければ最も単純な材料を選べ、と教えている。聴覚器官をもたない植物が音を受容し識別できるなら、それは生命体に普遍的な能力であろう。微生物にだってその能力はあるはずだ。

松橋氏の発表とはこうだ。納豆菌の仲間の細菌は空間伝達性のシグナルを発信し、また受信している。そのシグナルは、薄い鉄板では遮断はされない「音波のような」もので、最適な条件にある細胞には増殖阻害的に作用し、有害物質などでストレスを受けている細胞には増殖促進的に働く。細菌ばかりでなく、キノコの仲間の酵母、タバコの培養細胞やメダカにも影響を与える。

*

実際に自分の研究室で実験を始めてみると、音波のようなシグナルを確認することはなかなか難しい。でも、この文章でそのことに触れるのはよそう。何故こんなテーマで総合科学研究プロジェクト事業に参加するか、ということの方がもっと大切だから。総合科学には魅力と胡散臭さが同居している。よその世界に居れば、そう言って笑って済ませるこの問題に、僕は正面から向き合わねばならない。それを突き抜けた先に面白味が拡がると信じて、これはしんどいことだ。科学（個性）と総合性のジレンマは、自然科学者だけのものではない。科学という言葉が馴染まない人文分野の研究者をも含めたこの学部メンバーの、タコソボに籠もろうとしがちな性癖を打つ鞭である。

植物が音楽を聴き、バイ菌が音を出すだなんて、僕は興奮してしまっただけで、あまりまともな話ではない。万に一つどころか十中六、七は途中で立ち往生するだろう。その時にはどんな非難を受けることか、それは全部承知している。承知をした上で、その非難が出発点であっても構わない、勢力争いの根回しや成績評価の交渉とは違う、別な次元の会話が始まればよいと思った。今のところは特定の科学には属さぬテーマなのだから、誰でも気軽に議論ができるだろうと思ったのだ。

* * *

貴方が教官なら、俺達の配分研究費をかすめ取ってやってるお前のプロジェクトは如何なってるんや、と絡んで下さい。貴方が学生なら、バイ菌が音楽を聴いているかいのかどうやって調べるんですか、とでも訊ねて下さい。

注：学部の名前に関わることなので、村上陽一郎からの受け売りも交えて補足しておく。

かつて science という言葉は知識（自然の摂理）全体を指す広い意味をもっていたが19世紀の中頃に、分割された個別の領域群を示す用法へ変質した。明治日本が輸入したのはそれ以後の science であるから、「科学」という訳語はこれに相応しい。scientist は変質の頃の造語だから「科学者」にも過不足はない。science が古い時代の意味で使われるときにも「科学」と書くと、漢字本来の意味と衝突して混乱が起きる。6科目に分けられた試験であるから科挙であり、学部（学問）を分割する単位だから学科なのだ。ところで我々は多様な学問分野をかえながら1学部1学科を標榜している。これを「総合科学」と対して考えると、学部を創った先人の願いと戒めに、想い至るではないか。

本能と学習・記憶の制御システムの多角的解析

簡井和義（生体行動科学コース教授）

多彩な動物群には、共通して本能が存在するといわれています。また、ある種の進化した動物では、本能の他に学習・記憶する能力が備わっています。本能を制御し、学習・記憶を可能にするのが脳の働きです。私たちの総合科学プロジェクトの目的は、脳に存在する「本能と学習・記憶の制御システム」を多角的に解析し、これを具体化することです。随分スケールの大きなテーマですが、現在の脳研究の中の未来開拓推進分野の一つであり、主として高等脊椎動物を対象にしてこのテーマと取り組んでいます。

研究の基本姿勢を図1に要約してみました。

まず、脳内分子の働きを研究基盤にするために、本能行動（本能に従って現れる個体レベルの反応）を制御する脳領域と学習・記憶を司る脳領域において物質的解析を行い、重要な脳内分子を同定してその構造を明らかにします。同時に、分子の構造に加え、神経細胞と神経回路（神経細胞がつくるネットワーク）の同定をしてその構造も明らかにします。次に、脳内分子の作用を細胞レベルと神経回路レベルで解析し、さら

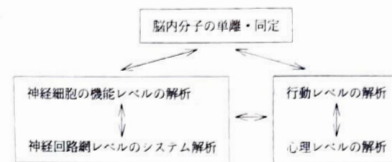


図1 本能と学習・記憶の制御システムの多角的解析

にこれらの成果を行動と心理レベルの解析に繋げて行くことを計画しています。分子レベルから行動・心理レベルまで視野に入れて研究を行うことは総合科学的探求であり、総合科学部の基本的精神でもあります。分子の単離・同定法、分子発現を解析する分子生物学的手法、分子機能を細胞レベルで解析する生化学的手法、神経回路のシステムを解析する電気生理学的手法、分子機能を個体レベルで解析するための脳手術法などの幅広い知識と技術が要求されますが、プロジェクト構成員の協力により、本プロジェクトは着実に進展しています。

そこで、本プロジェクトの成果の一部をここに紹介します。動物の社会では、攻撃から交尾に至る一連の生殖行動は代表的な本能行動であり、個体の生命維持、動物社会の秩序形成、動物種の存続などに不可欠な行動です。この生殖行動は脳に包まれて存在する間脳の視床下部・視索前野の神経制御のもとにあります。私たちはこの生殖行動に着目して研究を進め、生殖行動を制御する脳内分子を明らかにしました。具体的には、鳥類のウズラとキンカチョウの脳から3種のオピオイドペプチド（脳内麻薬分子として知られるニューロペプチド；ペプチドとは2個以上のアミノ酸がペプチド結合して生じる化合物をいう；中枢神経系に存在して神経細胞に作用するペプチドを総称してニューロペプチドという）を単離・同定し、これらのペプチドが生殖行動の中枢である視床下部・視索前野にある神経細胞の活動を著しく抑制することをまず見いだしました。さらに、生殖行動の発現におけるこれらオピオイドペプチドの作用を行動レベルで解析しました。雄ウズラの視床下部・視索前野に植え込んだニューレ¹⁾よりペプチドを注入して、行動解析を行った結果、オピオイドペプチドは視床下部・視索前野の神経細胞の活動を抑制し、攻撃行動や交尾行動の発現を抑えていることが明らかになりました。

つづいて私たちは、やはり本能行動である産卵行動を制御する重要なニューロペプチドを発見しました。動物が交尾すると卵子と精子が結合して受精します。受精した卵は成熟すると、やがて体の外に放出されます。これが産卵です。本プロジェクトの研究により、ガラニンというニューロペプチドが鳥類の産卵を誘起することが明らかになりました。



本能と学習・記憶

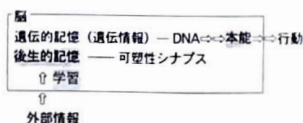


図2 情報を蓄えるDNAと可塑性シナプス

以上述べた本能行動は基本的には、遺伝情報 (DNAの塩基配列として蓄えられる情報をいう；DNAに情報を蓄えることを遺伝的記憶という) により、制御されています (図2)。つまり、本能行動を制御するニューロペプチドなどの分子、神経細胞、神経回路はDNAに蓄えられた情報が定期的に発現することによりつくられます。動物はDNAに蓄えられた情報を親から受け継ぐために、本能行動を生得的行動と呼ぶことがあります。これに対し、学習・記憶とは脳の細胞が外部情報をコピーする作業です。外部情報を取り込むことが学習であり、これを忘れないように固定化するのが記憶 (前述の遺伝的記憶に対してこれを後天的記憶という) です (図2)。現在の脳研究では、後天的記憶は可塑性シナプス^{註2)}に蓄えられると考えられています。変化し易くまたその変化が元に戻りにくい性質を可塑性といいます。最近、神経回路の要であるシナプスに可塑性が見いだされました。情報 (刺激) の入力により、その後の情報伝達効率が長期的に変わるシナプスが可塑性シナプスです。従って、可塑性シナプスを有する神経細胞が記憶能力を持つと考えられます。本プロジェクトでは、可塑性シナプスを有する神経細胞 (記憶ニューロン) がステロイドという重要な化合物を合成・分泌することを新たに発見しました。

ステロイドとはコレステロールを素材にしてつくられる脂溶性の物質であり、古くから本能行動を制御する生体分子としての機能が知られていました。ステロイドの脂溶性という物理化学的性状により、末梢内分泌腺のひとつである生殖腺が分泌するステロイド (性ステロイド) は脳を保護する血液-脳関門を通過して、脳にホルモンとして作用することができます。これまでステロイドは末梢内分泌腺がつくるもので、脳はこのホルモンの標的器官として位置づけられてきました。ところが、私たちの研究により、鳥類の脳が末梢内分泌腺のようにステロイドを合成することが明らかになりました。同様の発見は哺乳類でもなされ、この新しい概念の脳内分子はニューロステロイドと命名されました。さらに私たちは、このニューロステロイドを記憶ニューロンとして有名な小脳のプルキンエ細胞^{註3)}が合成・分泌することを発見しました (図3)。運動を正確にかつ円滑にするのが小脳の働きですが、この小脳の能力はプルキンエ細胞に存在する可塑性シナプスにより生み出されると考えられています。現在私たちは、プルキンエ細胞の可塑性シナプスに焦点を絞り、ニューロステロイドの作用を解析しています。プルキンエ細胞が合成するニューロステロイドの作用機構が可塑性シナプスとの関連で解明できれば、学習・記憶機構に関わる脳内分子の発見につながるものと期待されます。

- 註1：カニューレとは、動物体の一部分に挿入する細管で、分子を溶かした液の注入に用いる。
- 註2：シナプスとは、神経細胞と神経細胞の接合部位をいう。
- 註3：プルキンエ細胞とは、小脳皮質にある神経細胞であり、運動学習に重要な働きを担うといわれている。



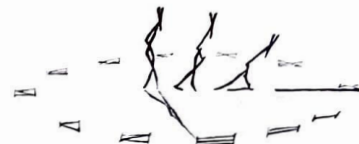
図3 ニューロステロイドを合成する小脳の記憶ニューロン

写真はステロイド合成酵素P450SCCの抗体と反応しているプルキンエ細胞の細胞体と樹状突起。プルキンエ細胞は記憶ニューロンとして知られ、可塑性シナプスを有している。

「黒べえ」と「スペル星人」

加藤 徹 (人間文化コース講師)

一昨日、久しぶりに近所のレンタルビデオ屋に行った。藤子・F・不二夫追悼コーナーが出来ていて、「オバQ」「ドラエモン」などのアニメビデオが並んでいた。藤子作品は人気があり、おおむね健全だから、過去にテレビ化された作品は、現在、たいていビデオでも見ることができる。ただ、中には例外もある。



ぼくが小学生のときテレビ放映された「ジャングル黒べえ」は、当時「オバQ」「ドラエモン」と並ぶ人気漫画だった。だが現在では、再放送もビデオ化も不可能となっている。一般に藤子漫画には、異界からの「ベム」が日本の普通の家庭に居候して珍騒動をまきおこす、という設定が多い。「黒べえ」の場合、ベムは、アフリカの奥地から来た「ピリミー族」の魔術師だった。

「ヒーローもの」コーナーに並んでいる「ウルトラセブン」のビデオも、よくみると「欠番」がある。箱の裏に「第十二話は現在欠番となっています」と書いてあるとおり、この回だけは再放送もビデオ化も自粛されているのだ。ぼくも、第十二話は四才のとき本放送で一回見たきりである。この回の宇宙人の顔は、かすかにしか思い出せない。地球人の子供の生き血を求めて地球に飛来した「スペル星人」の、核で被爆したケロイドの顔は。

なにも、ぼくはここで「差別表現の自粛」を論じたい訳ではない。ぼくが興味を覚えるのは、「黒べえ」や「セブン」第十二話のように、なにか外的な理由で作品が消された場合、作品自体は消滅しても、その作品名と「発禁」になった事実はかえって記録に残ることがある、ということである。



ぼくは中国の古典演劇を研究している。中国演劇史は、ある意味で「上演禁止」の歴史でもあった。中国の歴代王朝は、公序良俗の立場から、しばしば演劇を弾圧し、上演禁止演目のブラックリストを布告した。

中国では、古い時代の上演記録や脚本は、あまり残っていない。当時、演劇は正当な芸術とは見なされていなかったからである。逆に演劇禁止令の方は、行政文書として政府に保管されたから、よく残っている。皮肉なことに、現代の研究者は、古い時代の中国演劇研究を進めるにあたって、政府の禁止という「ネガ」的記録をもとに当時の演劇を推定しなければならない訳である。

今から一千年もたてば、われわれの子孫が「二十世紀末のレンタルビデオ店」の遺跡を発掘する日が来るかもしれない。ビデオテープの映像は磁気ゆえ消失する運命だが、ビニール製の箱は腐らずに残っているはずだ。未来の言語学者は「ウルトラセブン第十二話は欠番」という文字を解説するだろう。ただ第十二話がどんな物語なのかは、永遠に不明である。たぶん未来の学者達は、絶望的に少ない資料をもとに、第十二話とはどんな物語だったか、なぜ「欠番」とされたのか、それを欠番にした二十世紀とはどんな時代だったのか、推論の輪を広げ、あれこれ論文を書くに違いない。

ぼくらが今やっているのも、そんな仕事なのだ。

安全で住み良い賀茂学園都市を目指して

今 本 清 潔 (西条警察署長)

1 はじめに

最近、「治安の良い日本で安全神話が崩壊しようとしている」という内容のマスコミ報道に接することが多くなってきた。また、「日本は水と安全はタダと思っているが、安全はタダではない」という声も聞こえてくる。

これは阪神大震災や、オウム真理教団の一連の犯罪、けん銃による強盗殺人事件等、安全を脅かす事件・事故が相次いで発生していることも要因の一つになっているものと思われる。

数年前の高度経済成長時代の犯罪傾向は、犯人側に怨念、金目当て、証隠し等何らかの理由が存在した。しかし、近時の犯罪は、犯人自身の欲望を満たすために、無差別に攻撃する凶悪な犯罪が増加しつつある。

東広島市及び賀茂郡下の5町を管轄する西条警察署管内においても、本年に入って大学生をターゲットにした若者のひったくり、強制わいせつ、恐喝事件等が後を絶たず、決して快適で安全な学園都市といえない現状である。

そこで、広島大学学生を取り巻く犯罪実態と、被害を防止するために学生の皆さんに気をつけていただきたいことを申し上げる。

2 管内の犯罪発生状況とその特徴等

本年1月から、10月末まで刑法犯認知件数は1562件で、そのうち169件の10パーセント余りは学生を中心とした広島大学関係者である。大学関係者数約1万5000人と聞いているから、管内の人口約16万人に占める割合は約9パーセントで、犯罪被害率約10パーセントはほぼ符合していることとなる。刑法犯認知件数とは、自転車、バイク等の盗難から、ひったくり、恐喝等、被害にあった人から届出を受け、警察が認知した件数を総称するものであるが、管内で発生した全体の1割、すなわち10人に1人は広島大学関係者からの被害受理ということになる。

また、その中の80パーセントは、自転車、バイク等の盗難被害届であり、残り20パーセントは通称、凶悪犯と呼ばれる恐喝、強制わいせつ、ひったくり等である。もちろん、自転車、バイク等の盗難防止も大事なことであるが、それ以上に広島大学学生を被害者とする凶悪事件等が発生していることは憂慮すべき事態である。

これらの凶悪犯罪の特徴を挙げると、

- いづれも夜間（午後8時から午前0時）に広島大学に通ずる道路や大学周辺において発生している。
- ひったくり事件では、被害者はすべて女子大生で自転車の前かごにセカンドバック等を入れて走行中に被害にあっている。
- 犯行場所は、照明が不十分で暗いところを選んでいる。
- 恐喝事件は、3～5人の複数犯人で、犯行後、車で逃走している。
- 夜間、広島大学構内へ車両乗り入れ制限実施後、構内での恐喝事件の発生は減少したが、夜間学生が集まる深夜レストラン、カラオケボックス付近で発生している。

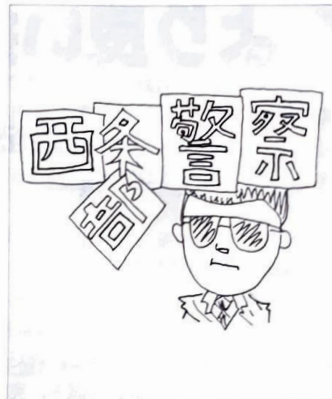
などである。警察としても「検挙にまざる防犯なし」の意気込みで、これらの凶悪犯罪の分析を行い、犯行予測をたて、張り込み捜査を実施するなど努力をしているところである。その結果、11月15日には張り込み中の捜査員が、発生後間もないひったくり事件の犯人を職務質問し、逮捕することが出来たが、すべての事件が解決したわけではない。引き続き、凶悪犯など重要事件の犯人を検挙して、再発防止に全力をあげていくことが極めて大切なことと考えている。



紙面をお借りして警察官と広島大学関係者の方との出会いを考えてみたい。

前述のとおり、犯罪の被害届を出される方やその反対の立場の人、また目撃参考人として事情をお聞かせいただいている方等、合わせれば被害届を出される方の数倍の方々とコミュニケーションさせていただいていることになる。

今一つ、交通事故、交通違反者の立場の方との出会いや、交通安全指導、年に2度の訪問を基本として実施している家庭の訪問活動等がある。それらを総合すると、数年間では天文学的数字となることは確実である。西条警察署管内には、本署のほか、7か所の交番と16か所の駐在所を配置して「生活安全センター」として機能させるべく努力している。大学の皆さんと良好な関係を保ちつつコミュニケーションを活発化させていきたいと願っている次第である。



3 事件に遭遇した際の心構えと措置

前述のとおり、広島大学学生をターゲットとした凶悪犯罪が多発している。これに対しては、広島大学学生の皆さんが悪を許さないという気概を持って毅然として犯人に立ち向かってほしいと思う。

特に、注意していただきたいことの1つは、早めの110番通報である。特に、ひったくりや恐喝の被害にあった場合は、近くの公衆電話あるいは携帯電話で、速やかに110番通報することが大切である。当然のことながら、発生時間、場所、犯人の人数、人相、車両の有無、逃走方向、あわてずに通報することである。11月15日に連続して発生したひったくり事件では、いずれの被害者からも早目の通報があり、あらかじめ張り込み中の捜査員により犯人を発見・検挙することができたものである。その2つは、犯人の人相、着衣、あるいは使用している車両の特徴をしっかりと見て覚えていて欲しいということである。恐喝等、犯人との面接犯では、犯人の特定に大いに役立つからである。その3つは、金銭等貴重品は必ず身につけて、行動することである。これまで、発生したひったくり事件では、現金の入っているセカンドバック等を自転車の前かごに入れて通行中の所を後方から車できた犯人に奪取されたものであり、被害にあわないためにも、大事なものは身につけておくべきである。先般、逮捕した犯人の1人は、「100パーセントの成功を目指してやった。バックを自転車の前かごに入れている女子大生を狙って犯行に及んだ」と言っていることから、周辺に注意を払い、自己防衛に徹していただきたいものである。

4 安全と自立

近年、災害、各種事件事故から身の安全を守ってくれるのは、国家や役所であるという風潮が強い。結果として、重大な被害が発生した場合は個人が国へ損害賠償を請求するケースをまま聞くことがある。

また、先頃、ある学校において、生徒が学校行事をやめなければ自殺する旨連絡してきたため、学校では大事をとって行事を中止したとの新聞報道がなされた。これら一連の現象を考察するに、言い過ぎかもしれないが、いかにも平成日本過保護社会の象徴のように思えてならない。自分の身は自分で守ることこそが、自立の第一歩と思う。そういう意味からも、まず、自己居住の部屋はもちろんのこと自転車やバイク等の鍵かけをしっかりとお願いしたいものだ。自分は何も努力しないで、他人が守ってくれるはずはないし、まして自分自身を守れないのに、他人を守ることは難しい。

広島大学学生の80パーセントの約1万2000人は、東広島市内のマンション等で独立した生活を営んでいる。節度ある生活を願いたいし、在学中に勉学も精出していただきたい。また、社会生活を営む上において、自立できる精神を十分培い、有意義な学生生活を送っていただきたいと願っている。

警察としても、引き続き治安面から、安全で住み良い賀茂学園都市づくりに署員一丸となって努力する所存である。

より良い授業を目指して

授業改善の方向性とは

市 橋 勝 (社会科学コース講師)



「飛翔」の編集委員をされている先生から、先日「どうすれば授業がよくなるか」ということについて何か書いてほしいと依頼された。

だが、考えてみると、「こうすれば授業がよくなりました」というような経験は私には皆無である。ただ、本学に赴任する前の大学で、ディベートスタイルの演習を試み、実際に県知事を大学に招いて討論会のようなことを行ったり、またパソコンの実習教育で複数教官及び協力学生による集団的教育指導を行ったりというような、ささやかな経験を有しているだけである。しかも、それらの教育諸実践は全て試行錯誤の過程で生まれたものであって、基本的な教育環境の違い等を無視したまま他の大学や教育機関に適用できるほど汎用性のあるものではないと考えている。

言うまでもないことだが、「どのように授業改善を行うべきなのか」という問題は、現行授業の何処に問題があるのかという問題と切り放せる問題ではなく、またそのことは、その大学や学生達が抱えている固有の問題と「大学の授業」というものが有する普遍的問題とをより分ける作業とも密接に関係している。従って、そのような根拠の必要な作業をここで果たすことなどは到底出来ない。だから、ここでは全くの話題提供として（個別的な体験談ではなく）一般論を勝手に述べることをお許し頂きたいと思う。

「最近の学生は勉強しなくなった」「どうも学生にはやる気が感じられない」「課題を与えないと学生は何もしない」……

このような大学の先生達の「嘆き」は、実のところいつの時代においても言われ続けてきたのではないかと、私個人は秘かに(?)思っている。私が大学に入学したのはもう15年以上も前になるが、当時も確かに周りの先生達はそうにおっしゃっていた。私は経済学を専攻したが、学生達の間でも「アホの人文、遊びの経済」などと馬鹿にされるような始末だった。また、同時代的には私達の世代を「新人類」「三無主義」「シラケ世代」などとも言った時代だった。ところが、社会統計学者安藤次郎の講義草稿『統計のための教養』（啓文社1964刊）では、「読書や思索は強制しなくてはダメだ——悲しいかな、これが現代新制大学学生の実態である」と、今から30年以上も前の学生達（ということは、現在50歳前後の世代）についてやはり嘆いている。更に、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』の中では、学生が「どのように生きるべきなのか」というようなことばかりを期待して大学に来るが、大学はそんなことを教えるところではない、と彼独特の大学授業論を展開している。

ここで、学問論を展開している余裕はない。言いたいことはつまり、「勉強しない学生」の存在は今に始まったことではない、ということだ。むしろ、学生の興味・関心が時代と共に質的に（かつ、ダイナミックに）変化していると解釈するほうが自然である。そのことを古い世代が自分達のフレームワークだけではしばしば解釈不能に陥る、と考えるほうが当たっているのかも知れない。（無論このことは、学生の量的拡大というこれまでの日本の大学事情とも無関係ではないだろう。）

だが、もしそうだとすれば、現在の広大生や総合科学部生は何が変わったと言うのだろうか？

私個人の意見は、学生諸君が学問を「効率よくこなすための障害物・対象物」として捉え、そしてそれを「消化する」ことについて極めてよく洗練されてきている、というものである。その意味で質的に「純化」していると考えている（無論、あくまでも平均的傾向についての解釈である。念のため）。すなわち、何を何故学ぶのかよりも、如何に効率よく単位を取るのか（試験をパスするのか）が最重要課題となってきた、ということだ。その構造的理由は言うまでもなく偏差値偏重教育である。だが、この偏差値は大学を受験する学生達だけではなく、当の大学の側でさえもなかなか放棄できずにいる。

11月9日号の「週刊東洋経済」や11月10日号の「サンデー毎日」では、最近の各大学の偏差値状況と、大学志望の傾向及び「生き残り戦略」とでもいうべきものを紹介している。学生数が劇的に減少するこれからの時代においても、偏差値が高い大学にはやはり学生が集まる。大学運営をする側から言っても、自らの大学がどのような偏差値の水準にあるのかということは、極めて重要な指標なのである。これからの時代においても高偏差値は重要なステータス・シンボルというわけだ。

だが、よく指摘されることだが、この偏差値偏重の教育の最大の問題点の一つは、学問を学ぶことの意義を考えることや、自分にとって内的に知的欲求が湧くような問題意識を育ませ難い仕組みになっている、ということである。動機はともあれ、「こなすべきプログラム」という形で（与えられるものとして）学問に接するように、日頃からトレーニングを受けている思春期の青少年達に、「大学に入ったら問題意識を持って学習するように」と言ってみたところで、大学を取り巻く諸環境（就職環境を含む）が偏差値に依存するようなシステムになっている以上、実際上それは極めて困難である。

もし、本当に偏差値から脱却した、真に学問を愛するような教育を行う大学や学部を目指すならば、偏差値が多少変動しようとも多様でユニークなカリキュラムと教育内容を内外にアピールし続けるべきであるだろう。

現在総合科学部は、1回生向けの「パッケージ科目」や「情報関連科目」などの試みを、これまでの総合科目に加える形で用意しつつある。また、全学的には1回生用のゼミナール「教養ゼミ」も来年度から実施の予定である。このような試行錯誤は今後もしばらく続く可能性があるだろう。

だが、私が（本学部に赴任して以来）問題だと思うのは、これらの教育カリキュラムや日頃の授業内容に関しての教官相互・コース間相互の交流が殆どない、ということだ。そのようなスタッフの側の状況で、真に多様でユニークな授業改善が見込めるのかどうか、更に、偏差値に強く依存したシステムを本当に改革できるのかどうか、私個人は残念ながら疑問である。



激動のオリキャン会議

9月11日、数十人の総科生が「来年度のオリキャンを考える」為に集まった。これは前年度の総科オリキャンを作った06・07生の発案によるものだが、それを追って「08でオリキャンを考える会」も発足する。こうした会議はオリキャンのスタッフ正式募集前に有志が開いたものであり、今までスタッフのものだった「オリキャンとは何か」という疑問を、公式な行事から切り放した形で総科生全員に問いかけたものとして非常に興味深い。

その後、オリキャンミーティングが7回、08ミーティングが3回、それにスタッフ正式募集の会議を含めて合計11回、秋休みをはさんだ2カ月をかけてこうした会議が開かれた訳だが、これらの会議の正直な感想を述べさせてもらおうと、混乱の連続だった、と思う。いったい何が混乱を引き起こしたのか、3つの項目にまとめて考えてみるとともに参加者の感想を聞いてみた。

知ってる奴は読み流せ

▼オリキャン用語の基礎知識

◆(総科)オリキャン

オリエンテーションキャンプの略。総科の学部行事で、例年新入生の95%以上が参加する大行事。4月下旬に泊まりがけで行われるが、その運営は学生側に一任されている。

◆オリキャン会議

スタッフ正式募集前に行われた一連の会議。「スタッフの意識が低い」という昨年の反省から生まれた。議題などの決定を行う事前会と、いわば本番である全体会からなる。

◆「0から作る」

昨年度のオリキャンをそのまま繰り返すのではなく、先入観を排し、オリキャンのすべてを最初から考え直して作っていくという事。08生に大ウケ。又、07・06生側も自分達の経験を語って意見の押しつけと受け取られるのを極端に恐れていた為、半ば合い言葉となっていた。だが、前年度の問題点にかわる具体的な論議を誰も提案しなかったため、結局は昨年度のオリキャンをたたき台にして議論が進む事になった。

◆08ミーティング

「0から作る」を実現するために、08生だけで集まって行われた会議。08生にとって全体会よりも意見を出し易い場であった。

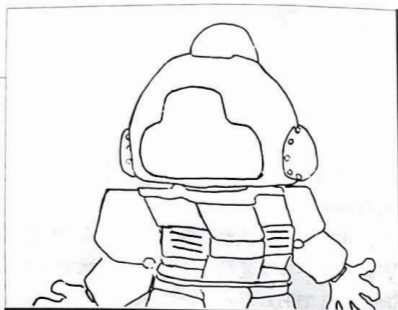


図.1 「うちらはジムか!」

提供: 松永孝治

◆事前会

自由参加であったが、最初の内は主な参加者が06・07生だったので、会議の内容を牛耳る「去年の経験」の象徴のように思われ、一部から反発を受けた事もあった。於K棟ロビー。

◆スタッフ

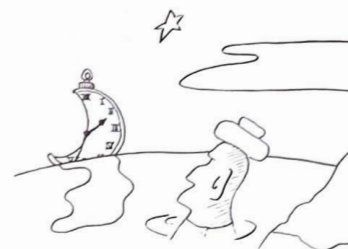
オリキャンの運営に携わる学生。例年は100人を超える大集団だが今回は募集前に会議がもたれたので、その意義や人数に関しての議論の結果大きく形態が変わった。

◆ヤル気

- ①スタッフとして積極的にキャンプを作っていく意気込み。
 - ②スタッフとして当日キャンプに参加し、新入生と仲よくなろうとする意気込み。
- 上記の2つの語義が曖昧なまま議論が進んだ為、「ヤル気」という言葉の価値は大暴落を起こした。

▼混乱1: 何でうちらがこんな事

そもそも何のためにこのような(しんどい)話し合いをしているのか、その事に対する合意や理解が08生にほとんどない状態から始まった。特に今回、08生に口をきくきっかけを与えるという目的から、キャンプの日時調整など必ずしも全体で話し合う必要のない議題まで提示されたので、さらに混乱が深まったように思う。いったい08生にとってこの会議はなんだったのだろうか。この問題は時間を追って意識が変化していくため、一概にどうと言える問題ではないかもしれない。だが少なくとも出発点において大部分の一年生は、「この会議に出なきゃスタッフになれないらしい」というように義務としてこの会議を捉えていたのではないだろうか。



▼混乱2: ものの解らん奴らだな

この会議の議題の中には去年の反省を基にしたものも多くあった。そのため08生の中からそのような議題で話し合う事自体が、「0から作るという目標にそぐわない」という主張もでた。この主張の是非はおいておくとして、この事は片側は議論に熱中しているが、もう一方は話を正道に(彼らにとって重要な議題に)引き戻すのに終始して、徒勞感に苛まれるというすれ違いを生んだ。また逆に議題を提案した側にしてみればもう一方の態度に不実さを感じるわけで、互いの態度に反感を抱いて、それが陰湿な雰囲気を作っていた。

さらに会議も終盤にさしかかると、「そちら、こちら」、「私からみて右の(方に座っている)人、左の人」で議論が通じるようになってくる。このような住み分けは、会議以外の場でオリキャンについて真剣に話し合う機会ができてきた事を示している点では評価できる。しかし、そうしたグループは常に固定されているわけで、そのグループの意見に会議中も固執しては他人の意見を理解する余裕もなく、会議として話は進まないだろう。そして、十分な議論なしでの多数決では、人を納得させることが出来ないのではないかと。実際、多数決で決定したことを蒸し返しての議論も所々見られた。

▼混乱3: 物言わぬ人々

第一回オリキャン会議後半、会議中の発言数は最初の頃の沈黙が嘘のように増加の一途をたどる。しかし発言するメンバーは固定されていて、口を聞かない人は最後まで口を開かない。どうすればこういう人達が発言してくれるかという事は、08ミーティングにおいて議題として取りあげられたが、そこでしきりに強調されたのは会議の雰囲気の悪さであった。勿論「雰囲気は自分で作る物。それで発言できないと言うのは甘え」という意見もあった。しかし、やはり会議がうまく機能していなかった事は事実だろう。一体何がまずかったのだろうか?

それは、某08生の「努力して意見を出しても、ガンダムのジムみたいに一発でやられちゃうから発言するのが怖くなる。」という発言が辛辣に状況を言い当てていたように思う(ちなみにジムとはガンダムというアニメにでてくる最弱の戦闘機で、大量生産できる事が唯一の長所)。いくら発言数が増えても、同じ人間が同じ内容の発言を大量生産しているだけでは、話は何一つ進まないのである。それどころか互いに相手の発言を自分が口を開くきっかけにしようと、虎視眈眈と機会を窺っているように感じられ、それがあまり発言しない人間に恐怖感を与えていたのではないだろうか。



愚痴

こんちいた (近藤雅見, 山田幸博)

オリキャンに関わっていくうえで、たくさんの方の会議が行われてきた。ここで少しその会議について考えてみようと思う。

この会議ではオリキャンという大きな行事を一から考え、それに関わる者としての約束事や心構え等を確認するのであるが、そういった大切な事を話すからなのか、とにかく空気が悪い。始めのころは全然意見がでなかった。僕自身、自分の発言に責任を持ってない気がしたし、とにかく非常に意見をいづらい雰囲気だったのだ。



会議の問題点は、1つの事に対してほとんど結論が出ないという事である。対立意見の長所を認め、生かしていくのが会議のルールだと思うのだが、この会議においては、始めから相手の意見の短所にばかり目がいくので話し合いは平行線をたどったまま不本意な多数決をすることになる。しかしその決定事項に対しても再び意見がでるといった状況である。みんなオリキャンを成功させたいと思っているから余計に自分の意見を主張するのだ。

こういった会議の中で、友人の意外な一面を発見できたし、自分の考えを伝える事の大切さを学ぶことができた。そして何よりも様々な考えを持っている奴が身の回りにたくさんいることがわかった。当然自分と全く同じ考えの奴など一人もいないのだ。だからこそそういったたくさんの考えを自分の中に生かしていきたい。

オリキャン

中島賢人

なんのためにオリキャンをやるのか？10月始めに08会議に行った時、そんなことを話し合っていた。内容がなく、何か話し合いが進んでいるように見えて、実は全然進んでないのがよく分かった。僕はオリキャンをやる理由を、1年生が大学にスムーズにとけこむためと考える。僕ら08生のときも、入学後花見だの新歓だのといって気付いたらオリキャンの班が決まっていた、何か大学生活の流れというものに乗ってる気がしてうれしかった。このころの08生は来年のオリキャンがすごく楽しみで、僕自身もフェローとして参加したいと思っていた。しかし、夏も終わり、次のオリキャンを真剣に考える時期になって、多くの人が果たして次のオリキャンの際に去年の先輩のよ

うに自分の時間のかかなりの部分をさいて参加できるのだろうか、と疑問を抱いた。オリキャンにかかわるとバイトにもサークルにも行けなくなるのでは、と思った人がたくさんいた。また9月から始まったオリキャン会議にもバイトやサークルで出席できなかった人たちは、いつのまにかオリキャンに向けての流れができていてそこに入りづらくなってた。しかしそういうことも考慮して今年は2段階に分けてスタッフを募集することになったようだ。これまで会議にもあまり参加できなかった僕にとってはたいへん革新的なことをしてくれたなとうれしい。

来年のオリキャンでは2次募集の時点から関わり、1年生のため、そして自分のためにも何かできることをしていきたい。

スタッフ募集前の話し合いについて

吉川愛沙

スタッフ募集前の会議では、主にオリキャンの意義や、スタッフになる人の条件について話し合った。最初の頃は、沈黙が続いたり、途中で行き詰まったりしてうまくいってなかった。自分でも、今何について話し合っているんだろうとか、何をいえばいいんだろうと思う事があった。まだ組織だとか具体的な事は何も決まっていなかったし、実際にキャンプを作った事のない人がほとんどだから、話し合いがうまくいかないの

は仕方ないと思う。けれど約100人もの人達が一緒にオリキャンを作るためには、オリキャンの意味やスタッフのルールはちゃんと決める事が必要だと思うし、そういう事を確認出来て良かったと思う。私にとって、班活動を含むオリキャンは、大学生へのオリエンテーションだった。オリキャンがあつて本当に良かったと思うし、09の人達にもそう思ってもらえるようなキャンプをみんなで作っていただければいいなあと思う。

オリキャンの私なりの否定的考察

小笠原鉄平

最初に、自分はあくまで参加者の一人であり、この文章は一つの見方ではないと断っておく。

まず、オリキャン運営が始まるまでに、昨年の反省を活かそうということで数度の会議が行われてきたわけである。しかし、いくらどうこうしようとしたところで、意識の高くないほとんどの人たちに初めから難しいことを言っても、何の反応もないのは当然のことである。それ以来、何もわからない、というよりむしろ、オリキャン運営を経験していない我々にはわかりようもないような上の学年が提示する議案に、何となくうなずき、意見すら出せないような空気の中で、議事は淡々と進行していくという状況がずっと続いた。その後、次第に08の発言も増えてきたが、一つの議案に対し、意見が2つに分かれてそれぞれが自分の主張ばかりし、また、話が

とびとびになって何一つまとまった内容が残っていないような会議になってしまった。

第三者的な言い方になってしまうが、もっと一人一人が広い視野を持ち、幅をもって考えていくべきでないのだろうか。

オリキャンは、新しく入学してくる1年生が、これから総合科学部という枠の中で過ごしていくための、いわば手伝いをするのが本来の目的であるということを忘れないでほしい。このままでは内容の何一つ代わりばえのしない、表面だけがすり変わっただけのオリキャンにならざるを得ないのではなかろうか。



この記事を書くに当たって、多くの関係者に協力をいただき、その中でみんなの真実さを色々な場面で感じることができた。その中にはスタッフとして残った人もいれば、他の活動に精を出している人もいる。そのような人達がそれぞれにこの会議に関わってきたのは、ある08生が言ったように「(面倒だし、話はまとまらなくても、) やりがいがある面白い」からだろうか。

「面白くていい」というのは部外者の気楽さと反感を買うだろうが、面白みを感じるほど真剣に混乱すればこそいい物が出来ると期待したい。去年よりもいいオリキャンを、から始まった平成9年度総科オリエンテーションキャンプ、結果が出るのは半年後だが楽しみに待っていたと思う。

(文責：石橋淳也)